

第 65 回 国際理解・国際協力・多文化共生のための全国中学生作文コンテスト東京都大会 金賞

東京学芸大学附属小金井中学校 3 年

酒谷 樹里

課題①

あなたが考える平和とは何か。そのために何をすべきか。

副題

平和のために――空気に流されない力

差別や戦争は自然災害とは違い、人間が始めてしまうものだ。それなのに繰り返される原因の正体は「言えない空気」ではないか――私は最近、そう考えるようになった。

小学校四年生の夏、母の勧めで参加したハンセン病資料館の学習イベントで知ったのは、悲しい歴史だった。当時「らい病」と呼ばれたハンセン病患者が、国の「無らい県運動」によって見た目が違うというだけで強制的に収容され、自由や命を奪われた。「おかしい」と声を上げた市民もいたが、その声は社会の空気にかき消されたという。この歴史を学校の皆にも伝えたいという一心でまとめた七十二ページの冊子は、学校で研究奨励賞をいただき、資料館にも展示された。今思えば、あの経験が「空気」について考えるきっかけだった。

その翌年、社会はコロナ禍に揺れていた。「県外ナンバーお断り」「マスク警察」という言葉が飛び交い、私自身夏休みの旅行を家族に「行きたい」と言えなかった。それでも家族は、わざわざ感染者の少ない地方のナンバーの車で旅行に連れて行ってくれた。宿の駐車場に全国のナンバーが並んでいるのを見て、私はなぜかほっとした。今思うと、あの時、ナンバープレートに反応していた私は、空気に押されていたのかもしれない。

中三の今、授業で「臥薪嘗胆」という言葉に出会った。三国干渉の悔しさを忘れまいと掲げられたこの言葉が、日露戦争を望む空気を広げていったという。このことを知ったとき、それまでの体験が「言えない空気」という言葉でつながった。人は孤独や不安を恐れて「みんなと同じでいたい」と思うことがある。その心理が、異なる声を押しつぶす空気を生むのだと思った。そのことに気づいた今、私は「空気に流されない力」を持ちたいと強く感じている。今も世界には「〇〇のための戦い」「〇〇からの解放」「〇〇ファース

ト」といったスローガンがあふれている。恐怖や不安を利用して人々の感情を一方向に揃え、異論を封じる空気がつくられる。けれど、どんな時代にもその空気に流されず声を上げた人たちがいた。ハンセン病の時も、コロナ禍の時も。そして今も、飢餓や紛争、気候変動などに立ち向かう若者や市民がいる。そうした声が少しずつ社会を変えてきたのだ。

私は誰も傷つかないことが平和だと考えている。国連が掲げる SDGs には「平和と公正をすべての人に」とある。その実現には、国同士の努力だけでなく、私たち一人ひとりが空気を疑い、自分で考える習慣を持つ必要があると思う。授業で多数派と違う意見を言うとき。いじめを前に声を出すとき。リーダーや委員として、少数意見を出しやすい雰囲気をつくるとき。その一つひとつが「空気に流されない力」を育てる機会にもなる。

そして私は願う。国連のように国同士が話し合う場はあるけれど、人と人とが立場を超えて本音で語れる場はまだ少ない。特に若い世代は、利害やしがらみに縛られにくい。だからこそ、若者同士が語り合える場が広がれば、空気を流されない新しい声がきっと生まれると思う。中学生であれば、まず学校生活や部活動の話から聞いてみたい。その上で、社会の問題や不安について話し合いたい。そうすれば「違い」を怖がるのではなく、「理解しよう」とする空気が生まれると思う。違う地域に生まれた同世代とも、平和をつくる仲間になれると信じている。

私は、身近なところから空気に流されない力を育てたい。感情に流されず、知らないことをそのままにせず、違う立場の声にも耳を傾け続ける。その積み重ねがきっと空気に負けない心を強くすると信じている。誰もが傷つかない平和の実現に必要なのは、大きな声がつくる空気に押しつぶされずに声を上げられる社会だ。だから私は、自分からその一歩を踏み出す。